

意欲のあるところに楽しみと進歩

先年、ヴァイオリン指導で有名な鈴木鎮一先生からこんなお話をうかがいました。先生の幼いお弟子さんたちよりも、そのお母さんたちのほうが熱心で、肝腎の習う子どもには“やる気”がない、ということがあるそうです。そういう子どもには、一か月でも二か月でもヴァイオリンに手を触れさせないで、ただ皆の練習するのを見学させておくのだそうです。人間というものは不思議なもので、「してはいけない」と言われて禁じられると、かえってそれをしたくなるものです。ヴァイオリンを持つことを禁止された子どもは、日ごとに「持ちたい」「ひきたい」という気持ちを強めてきます。そうしてひきたくてたまらなくなった時に、初めてヴァイオリンを持たせるのだそうです。もはや“やる気”十分ですし、音を出すことができた喜びが、さらに“やる気”を増す、ということになります。ですから、苦痛をともなう練習も少しもいとわずに、夢中になって練習します。“進んで負えば重荷も重からず”で、自分から求めてする練習なら、その練習のつらさも決してつらくなく、苦痛も決して苦痛にはなりません。

このごろ、幼児のうちから音楽教育を受ける子どもが多くなってきていますが、多くは子どもの気持ちに関係なく、ただ母親の気持ちだけで子どもを叱咤激励してやらせている、というのが普通ではないでしょうか。しかし“やる気”のない練習では、いくらやらせても進歩がありません。いや、進歩がないだけでなく、音楽そのものがきれいになってしまいます。

漢字教育でも同じことです。母親が、子どもに漢字を覚えさせたいとどんなに望んでも、子どもにその気がなかったならば、どうすることもできません。ところが、母親は、「漢字に強い子は成功する」と聞くと、漢字を教え込もうと夢中になりやすいものです。

一体、教育というものは、子どもを何かに夢中にさせることであって、教育に当たるものが夢中になっては、冷静を欠き、正しい判断ができないので、処置を誤って失敗します。

子どもが求めるようになる条件をつくり、そして求めるのを待って、その機をのがさず教えてやれば、なにごととも一度で覚えてしまいます。

親というものは、子どもに対して貪欲なものです。子どもにとって少

しでも有益になることだと思えば、あれもやらせたい、これもやらせたいと思います。それは、親の情として自然でしょうけれども、教育に当たっては、もっと理性的でなければいけません。

いくらカツオブシが好物でも、食べる気がないときには、猫も顔をそむけます。人間である幼児が、望みもしないことに努力するはずはないのです。

ところが、親は、理屈ではそれがわかっている、やはり自分の要求を子供に押しつけようとするをやめません。ここに、親が子どもの教育に失政しやすい理由があるのです。

世界一の教育者である孔子でさえも、わが子を教えることが少なかったのは、やはり“子を教えることのむずかしさ”を感じていだからでしょう。わたしたちは、このむずかしさを常に心に留めておくことが必要だと思います。